

**P-249** 高齢者肺癌の検討

浜松医科大学第一外科

豊田 太、影山善彦、野木村宏、小林 亮、鈴木一也、  
原田幸雄

【目的】高齢者肺癌の手術適応は徐々に増加している。そこで、術前検査、術後合併症等につき検討した。

【対象と方法】1988年1月から1992年12月までに当院における高齢者（満70歳以上）手術例は28例であった。これらにおいて、術前機能検査、手術、術後合併症等につき検討した。【結果】年齢は70歳から82歳（平均73.8±3.2）で、男21例、女7例であった。組織型は、腺癌14例、扁平上皮癌10例、大細胞癌2例、小細胞癌2例で、病期は、Ⅰ期16例、Ⅱ期1例、ⅢA期8例、ⅢB期3例であった。呼吸機能検査では、VC 2.42±0.56L、%VC 85.7±15.7%、FEV<sub>1.0</sub> 1.67±0.42L、FEV<sub>1.0</sub>% 69.9±11.1%で、動脈血ガス分析では、PaO<sub>2</sub> 79.7±9.0Torr、PaCO<sub>2</sub> 41.0±3.5Torrであった。右心カテーテル検査施行14例では、平均肺動脈圧14.3±3.3mmHg、心係数3.29±0.62L/min/m<sup>2</sup>、全肺血管抵抗296.5±76.3dynes·sec·cm<sup>-5</sup>·m<sup>2</sup>であった。手術は、葉切22例、区域または部分切除3例、試験開胸3例で、リンパ節郭清は、R<sub>0</sub>群6例、R<sub>1</sub>群11例、R<sub>2</sub>群8例であった。術後合併症は16例に認められ、排痰障害並び無気肺9例、肺炎2例、喘息1例、せん妄4例、不整脈2例、心不全1例、air leak5例で、特殊なものとして胆管癌1例があった。【結語】呼吸器合併症が多く、その管理が一層重要と思われた。

**P-251** 80才以上高齢者肺癌症例の検討国立療養所富士病院外科<sup>1</sup>，順天堂大学胸部外科<sup>2</sup>  
順天堂大学第一病理学<sup>3</sup>，○泉 浩<sup>1</sup>，堤 正夫<sup>1</sup>，石原重樹<sup>1</sup>，石本忠雄<sup>1</sup>，  
石川創二<sup>1</sup>，見上光平<sup>2</sup>，須田耕一<sup>3</sup>，

【目的】80歳以上の肺癌症例18例を経験し、その診断と治療法、予後について検討した。

【対象】11年間に当院に入院した80才以上の肺癌症例は18例で、性別は男子14例、女子4例。年齢は80歳から87歳、平均81.8歳で、80歳前半が多くを占めていた。組織型は扁平上皮癌9例、腺癌5例、小細胞癌4例であった。臨床病期はⅠ期10例、Ⅱ期1例、Ⅲa期2例、Ⅲb期1例、Ⅳ期4例で扁平上皮癌や腺癌はⅠ期症例が最も多くを占めたが小細胞癌は3例がⅣ期症例であった。治療は肺切除3例に対し、非切除例は15例で放射線療法4例、化学療法1例、無治療群10例であった。

【結果】予後は担癌生存2例、癌死11例、他病死5例であり、平均1年5カ月生存している。Ⅰ期例は平均1年10カ月であるが、Ⅲb期、Ⅳ期の進行肺癌例は予後が悪く、また小細胞癌例の予後は平均3カ月と悪い。肺切除例3例の予後は1例は2年1カ月で脳転移で死亡。他の2例は1カ月、6カ月の生存で、術後の早期死、退院後の他病死であった。放射線療法4例の予後は小細胞癌が2例含まれているため平均7カ月と短い。化学療法1例はⅠ期であったが10カ月で癌死した。無治療10例の予後は平均1年9カ月であり特にⅠ期無治療4例では平均3年3カ月（43日～9年）生存した。

**P-250**<sup>\*</sup> 75歳以上高齢者肺癌治療の検討兵庫県立淡路病院外科 放射線科<sup>1</sup>○八田 健、松田昌三、栗栖 茂、大藪久則、  
喜多泰文、隠岐公二、梅木雅彦、絵野幸二<sup>1</sup>

目的：75歳以上高齢者肺癌症例の問題点検討

対象 方法並びに結果：最近5年間の当施設における原発性肺癌症例273例を対象に、75歳以上症例の問題点について検討した。80歳以上は42例（15.4%）、75-79歳が52例（19%）、70-74歳が51例（18.7%）、60歳代82例（30%）と、75歳以上が273例中94例34.4%を占め症例の高齢化は著しかった。94例の組織型は非小細胞癌71例、小細胞癌16例、不明7例であった。発見動機は検診3例、他疾患治療中の胸部異常陰影11例で、残りの80例は血痰、咳嗽、胸痛、発熱、呼吸困難などであった。病期はstage I 23例、II 3例、III A 13例、III B 17例、IV 38例と進行例が多かった。治療は75-79歳では手術12例、化療と放治9例、化療4例、放治9例、レーザー焼灼1例、無治療17例で手術拒否4例であった。80歳以上では手術1例、化療7例、放治12例、無治療22例で手術拒否7例であった。また80歳以上症例では化療は癌性胸膜炎や心嚢炎に対する胸腔内や心嚢内への抗癌剤投与が多く、放治は転移部の疼痛除去目的が多かった。手術切除率は70-74歳が51例中22例43.1%、75-79歳が52例中12例23.1%、80歳代が42例中1例2.4%であった。まとめ：75歳以上肺癌症例では症状が明らかになって初めて医療機関を受診する進行例が多く、無治療例は41.2%と高率であり、手術切除率が低下し、手術拒否も多々みられた。

**P-252**<sup>\*</sup> 70歳以上高齢者肺癌における肺全摘除術症例の検討神戸大学第2外科<sup>1</sup>，同放射線科<sup>2</sup>○阪本俊彦<sup>1</sup>，石井昇<sup>1</sup>，岡田守人<sup>1</sup>，松岡英仁<sup>1</sup>，  
岡田昌義<sup>1</sup>，足立秀治<sup>2</sup>，河野通雄<sup>2</sup>

【目的】高齢者には低肺機能例が多く、肺全摘除術等、侵襲の大きな手術は、患者の生命予後、術後QOLの面からできるだけ回避すべき術式である。今回我々は70歳以上高齢者肺癌における肺全摘除術症例の術後合併症、予後について検討した。

【対象】1980年から1992年までに当科において切除した原発性肺癌411例中、肺全摘除となった症例は80例あり、この内70歳以上の17例を対象とした。

【結果】年齢は70～79歳（平均74歳）、男14例、女3例、右肺5例、左肺12例、組織型は扁平上皮癌11例、腺癌4例、腺扁平上皮癌1例、大細胞癌1例、病理病期はⅠ期2例、Ⅱ期0例、ⅢA期6例、ⅢB期5例、Ⅳ期4例でⅢ期以上の進行例は15例（88%）であった。手術に関連した院内死は3例あり、原因は心不全2例、気管支瘻1例であった。心不全は院内死の症例を含め4例に発生したがすべて75歳以上の症例であった。17例全例の1生率は56%、5生率は49%であり70歳未満の肺全摘除術症例よりも予後は良好の傾向であった。

【結論】高齢者肺癌に対する肺全摘除術において、術後合併症やPSの低下は比較的高率に認められた。しかし適切な術後管理により長期生存が期待される症例もあった。